

授業資料：楽観バイアス・悲観バイアスと倫理的発達

荒木, 正見

総合文化学会事務局 : 会長 : 総合文化学会・哲学・倫理学・心理学・比較思想

<https://doi.org/10.15017/4740659>

出版情報：総合文化学論輯. 14, pp.39-45, 2021-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。

研究ノート

授業資料：

楽観バイアス・悲観バイアスと倫理的発達 荒木 正見

本稿は医療従事者を目指す学生に対する授業や、一般の講話などで用いる資料である。各所で用いていたが特に新型コロナウイルスの蔓延に関して授業でリモートでの配信を行ううちに、当該学校関係以外の医療従事者から学校で配信された資料を手に入れたいというご希望が寄せられるようになった。学内インフラに外から入ることができないので、本誌に研究ノートとして掲載し、国会図書館や九州大学附属図書館リポジトリなどでクラウド化して一般の便宜に供したい。

なお、資料につき、簡潔な表現を心がけたことと、事情に応じて今後改定を続けることとお断りするとともに、改定に向けてのご意見を賜れば幸いです。

1. はじめに

この資料では楽観バイアスと悲観バイアスを比較し、それぞれのメリット・デメリットを確認したうえで、デメリットを乗り越えるためには、エビデンスを重視すべきこと、およびその背景としての倫理的発達に着目し、各自倫理的発達を理解し自ら発達を遂げるべきことについて述べる。

また、現実的な目的として、倫理的発達レベルについて理解しておくことで、対人的な理解が深まり、ひいては、自己のストレスの解消や、日常行動における人間関係の調整に寄与することを期待する。

なお、稿の性格上、難渋な論文形式は努めて避けて、論理的筋道を簡潔に伝える形式をとることをお断りしておく。

2. 楽観バイアス

周知のように、バイアスとは心理的行動的傾向性を意味する。

楽観バイアスは、認知バイアスのひとつで、何事も楽観的にみようとする傾向性だと言える。

楽観バイアスのメリットは何よりも自己の精神的安定性を維持するところにある。

医療現場において、重篤な症状の患者に対して医師や看護師が「だいじょうぶですよ。」と一言伝えるだけで、患者が精神的安定を得て寛解に近づくことや、教育現場やアスリートの指導現場において「君ならできる。」と激励して劣等感を払拭することなどは、この楽観バイアスを利用した行為に当たると言えよう。

しかし、それには勿論リスクを伴う。

その最大のリスクは、問題のリスクを見落とす可能性があることである。

臆病な性格、コンプレックスやそれと関連した自己顕示性が大きな場合、度を越えた楽観性を発揮するばかりか、ネガティブな発言や様々な可能性を探求する研究者などに対して攻撃性を発揮することさえ生じ、社会の混乱を招くこともある。

また、一部のものの利益など特別の他の事情によって意図的に楽観バイアスを社会に膨らませようとすることは日常普通に行われている。

社会的危機や災害が迫ってもそれを指摘する有識者などの意見などに対して、「自分だけは大丈夫。」「これまで大丈夫だったから今度も大丈夫。」などと自己合理化を図り一時的に自分を宥め、さらには、有識者などを攻撃し、結果的に自分や社会に危機を招くことは注意すべき要点である。

楽観バイアスは、上記のように、本来は生存にとって必要なバイアスでもあるのだから、適確に用いれば有意義なものである。本稿ではそのために、一般的に言われるように、エビデンスを重視することと、それに加えて個人と社会との倫理的発達を重視すべきことを述べるが、その前に、対照比較的に悲観バイアスについて述べる。

3. 悲観バイアス

悲観バイアスとは、文字通り何事も悲観的にみようとする傾向性である。

そのメリットとしては、一般の認識よりも細かく問題点を探すので危機管理にはふさわしい。

他方、デメリットとしては、余りにも細かく問題点を探すために、個人やシステムのエネルギーを削ぐ可能性がある。特に個人の場合、現実性と可能的悲観性との区別が無く

なると、鬱症状や不安神経症など生命体としての危機を招くことがある。これは、組織運営においても言えることで。時に組織発展のエネルギーを消耗する可能性もある。

このリスクを認識した上で思考すれば、医療職や研究職を始めとする問題点を探求する専門職には必要な態度である。

特に、組織のマネジメントには危機管理上必要なバイアスでもある。

このように悲観バイアスは主に危機管理において重要な役割を發揮するが、やはりこの場合も、エビデンスを重視することと、情報は情報としてすべて意味があるが、問題解決のために、情報を平板に流すのではなく、それらの情報の位置関係を考慮しつつ、問題解決を図ることが求められる。この位置関係を考察できる態度にこそ、倫理的な発達基準を配慮することが求められる。

4. バイアスとエビデンス

どのようなバイアスでもその影響を少なくするためにはエビデンスが有効であることは言うまでもない。

エビデンス、すなわち論拠は単純に観察的事実のみを真理と見做すわけにはいかない。観察それ自体にバイアスが働き、情報を選択的にピックアップしているからである。

このリスクを回避するためにこそ論理的思考がある。

しかし、バイアスという点から考えれば論理的思考にも問題がある。

論理的思考は事柄を因果関係に従って繋いでいくものであるが、事柄 A と事柄 B とが因果的に繋がっているかどうかは、考察の前提によるものだからである。A だから B になったという論理が前提を入れ替えれば因果関係が逆転する事さえ起こりうる。

周知のようにこのようなリスクを避けるためには論理的思考を繰り返し行って真理に迫らなければならないし、理論上、それが可能であるとする、フッサールやハイデッガーの循環論は評価するに値するが、それでも常に前提－バイアスから逃れることは出来ない。

と、なればこの前提－バイアスをより高い次元で考えなければならないのではないか。この点に本稿の次の考察が求められることになる。

5. バイアスと倫理的発達

このように論理的考察によりエビデンスを求めようとしても結局はその思考に前提が関係するのであれば、その前提には最も根底的な前提が求められることになる。我々の行

為におけるその最も根底的な前提は倫理的な前提であり、普遍的には「人類の生存」である。

倫理学においては、様々な理論が考察されてきた。理論である以上それぞれに「人類の生存」を目標としているが、それらをまとめて理解する際、倫理的発達を意識すれば理論的進展が分かりやすいといえる。

このことは、身近なテキストにも簡潔に紹介されている

例えば、丸山マサ美編著『医療倫理学 第2版』第3節(中央法規出版、2009年/2015年、47頁～62頁)では、倫理学とは一見答えの出ないものであるかの学問でありながら、功利主義や義務論など人類の生存にとって必要な生き方について比較されている。(当該箇所執筆は新名隆志)。

また、宮坂道夫他著『系統看護学講座 別巻 看護倫理』(医学書院、2014年/2021年、12頁～15頁)にも、義務論と帰結主義としての功利主義が比較的に取り上げられている。

このように、功利主義や義務論を生かした実践が求められているが、それらが我々の行動理解において、どのように相互連関しているかについては説明不足が否めない。

従って、以下、楽観的バイアスや悲観的バイアスのような一般的バイアスに勝る根本的前提としての倫理理論について整理しておく。

なおそれは、発達的に理解するのが理論的であると言えるので、理論以前から始まって、総合的な理論としての徳論に至る流れとして考察する。

この場合、すべての倫理的な前提として、人類の生存を目指すものであることが必至であることは言うまでもない。

まず、人々の行動理解において、理論以前、即ち人類の生存には届かないレベルを列記する。

1. 奴隷レベル

このレベルは文字通り奴隷のように主体性が無く、価値の基準が常に他者にある段階である。すなわち、叱られるから、恥ずかしいから、カッコ良いから、などのみを行動基準にする場合である。勿論、我々は社会的ルールや習慣、風習など自己の外にある基準を守って生きている面もある。しかし、それが自身の生存にとって必要なことであると主体的に感じているからである。幼児のようにこのことを理解できない場面では社会が教育する。この教育の要点は社会の生存を通して自身の生存を守れるように、自己自身で主体的に判断できることが目標であることは言うまでもない。改めてバイアスを想起すれば、主体性が無ければ何らかのバイアスの奴隷になりかねないと言えよう。

2.自己中心レベル

では主体性がありさえすればよいかといえば、そうではない。主体性だけで行動するのは、一般的にも自己中心的であると言われる。このレベルの特徴は、価値の基準が常に自分だけにあり、とかく、好き、嫌いで判断するところにある。

この場合、一見合理的な説明をして、論理的エビデンスを述べているようでも、丁寧に耳を傾けてみれば、実は自分の労力や金銭が惜しいだけであることが多い。

その場合、価値の基準の第一が人類の生存ではなく、時には自分の生存でさえもなく、金銭などのような、倫理的には副次的なものの場合もある。

それらは本能的には自分の弱さだと感じているので、他者依存が目立つし、さらには依存したい他者を支配する方向へと向かう場合もある。

主な傾向としては、時間空間認識が狭く、未来を見通して行動することや、また、グローバルな地域意識を持つことが苦手であり、結局は目先の自己だけの認識で生きることが目立つことになる。

以上、奴隷レベルと、自己中心レベルは、述べられたような意味で、人類の生存を目指すとは言えない。ところで以下の諸理論はそれぞれに理論的説得力があり、先の医療倫理学のテキストにも簡潔にまとめられている通りである。

しかし、勿論それぞれに長所短所がある。以下、それらを纏める。

3.功利主義

結果論とも言われ、また、「最大多数の最大幸福」とも言われるように、結果的に多くの人が幸福感を感じることに意義があるという考え方である。

- ① 量的功利主義（ベンサム etc.）は、多くの人が多くの幸福感を感じることを目標とする。選挙などの多数決的な場面では有効であり、時にこれこそが民主主義的であるとさえ言われる。

しかし一方で、多くの人の共通項であるとなれば、感覚的、本能的な幸福感に流れる危惧がある。それは、結局は自己中心的なあり方に墮落する危険性を孕む。

- ② 質的功利主義（ミル etc.）は、量的功利主義における問題点を克服すべく、人類の生存にとって役に立つ事柄を幸福と感じる人が多い事柄に価値を見出す、と説く。例えば文化的な遺産のように個々が与える幸福感の量は少なくとも、多くの人に質的な感動を与える事柄の方が人類社会にとって有意義ではないかという考え方が生まれた。これが、ミルなどが唱えた質的功利主義である。確かに感覚的・本能的幸福感だけでは自己中心性に墮ちる可能性もあり、ひいては生存にとって危険な場面も生じる。そこで、理性的に考え、

多くの人がある考え方を支持すれば、それは人類にとって価値あるものであると言える。

しかし、この場合も、多数が理解すべきことが前提となる。人類の危機管理にとって想定外の事態に対する知識が重要であることは言うまでもないが、それは、多数派の想定内の知識とは異なる。すなわち、質的功利主義では、少数派の価値や多様性の価値の説明ができないことになる。

4. 義務論（カント etc.）

カントは我々が行動する場合、自分に対して理性的に命令を下してより生存に相応しい生き方を行うとする。その場合には、例えば、研究活動、福祉活動などのように、たとえ少数派であったとしても、また経済的には報われないかもしれないが、人類の生存、ひいては全ての生命、社会、宇宙すべての環境にとって重要な事柄に価値を感じて行動する。これは人類特有の究極の危機管理であるともいえる。芸術活動、文化活動、自己犠牲などもこのようなメカニズムで少数派によって行われている。それらは少数派ではあるが、人類の生存にとって不可欠なものである。

6. 徳論（アリストテレス、孔子、ヘーゲル etc.）は、これまでの功利主義や義務論を統合したものであると言える。今日につながる諸学の嚆矢となったアリストテレスや、諸々の広範かつ多様な生き方について生存を目指すべく説いた孔子や、『エンチクロペディ』に代表されるような広範な事柄を体系的に展開したヘーゲルなどに共通することは、広範かつ多様な知識を背景にして、同時に確固たる倫理的生き方を説いたところにある。そのような豊かな知や多様な理論を以て生存原理を基に説かれれば、その対象者が誰であれ容易に理解できることになる。また、その知識の中には功利主義や義務論も含まれ、それらを状況に応じて使い分けることにもなる。

このような徳を身につけた人は、成熟した価値観を身につけ、その人の存在自体が他者にとって癒しとなり、成長発達を助けるような態度がとれる。そして、知識、知恵が完璧であることは当然だが、当人が完成した大人であるにもかかわらず、他者とは、知識の広さと心身の成熟を以て、相手に応じて、時にはユーモアを交えて表現、援助できる。

6. 結び

以上、倫理的発達に沿って筆者なりに整理してみたが、一般的には発達レベルの低い

ものと付き合うと、自分のエネルギーを吸収されることになり自分の生存が不利になるので避ける方が良いと考えられる。

しかし、多様性の価値原理から言えばすべての人々と関わる必要もある。特に医療、福祉のように職業的に関わる人々や、人道的な動機によるボランティアなどは貴重な存在であるし、家族や友人など関わらざるを得ない場合もある。

このように、発達レベルの低いものに関わる場合には、自らのエネルギーの量（心身の量的エネルギーや経済力）や質（エネルギーロスの少ない生き方、多様で豊かな知識）を考慮しつつ、生存を基準とした合理的なかかわり方を心得、できるだけ自身のスーパーバイザーを持って、自分のレベルダウンを防ぐことが望ましい。

そして、更に倫理的基準を想起。人類の生存、それも危機管理のための多様性とすべての生命の共生を前提としたホメオスタティックな生存を考慮しつつ、理性的に行動していかねばならないと言えよう。

最後に、本稿の性格上、簡潔に述べてきたが、本来はより詳細精確に論ずるべき重要な課題でもある。今後その考察を深めることが求められる。

[Optimism Bias, Pessimism Bias and Ethical Developmental Stage]

[ARAKI,Masami、・総合文化学会・哲学・倫理学・心理学・比較思想]

※ 本稿は、「楽観バイアス・悲観バイアスと倫理的発達」『総合文化学論輯』第 14 号（2021 年 5 月 1 日）を 2022 年 5 月 20 日に改訂したものである。